

中嶋洋一先生直伝!

稲岡先生の授業から学ぶ授業スキル 55

文責 7G・上山晋平

この冊子は、中嶋洋一先生主催の「地球市民オンライン塾」の10月例会(2023年10月20日)で視聴させていただいた稲岡先生の授業(中2 未来時制 be going to の導入)をもとにしたものです。稲岡先生の授業のポイントの中嶋洋一先生が解説された「謎解き編」(全23ページの資料)をもとに、我々教員が学べることを「授業スキル」としてまとめ直したものです。



この授業スキル55は、次の手順で作成しています。

- ①冊子を読みながら印象的な部分に下線を引き、ポイントを自分の言葉で余白にメモする。
- ②再度読み直し、2種類の付箋で「できているところ」と「できていない部分」の仕分けをする。自分ができているところには「黄緑」の付箋、できていない部分(知っているが実行していない部分)には「ピンク」の付箋を貼った。黄緑の付箋は5枚、ピンクの付箋は39枚となった(できていないことが圧倒的に多い)。
- ③このまま仕分け作業だけで終わると、時間の経過とともに忘れてしまうので、貴重な学びの忘却対策として、ピンクの付箋(できていないこと)を中心に、要素を小さく分割してスキル化してまとめることにした。
- ④当然、授業におけるスキルは、その文脈の中で意味を持つものではあるが、稲岡先生のマインドを学ばせていただいたうえで、小さなスキルに分割することで、他の場面でも汎用可能なものになると考えた。
- ⑤何より、自分でまとめると理解が進み、自分でこだわってまとめたものは大切に取組むことができるはず。
- ⑥この冊子を職員室の机の上に置いておき、時々見返し、できたら口に✓する。できていないものを意識的に取組むことで、具体的な成長につなげる。

ただし、中嶋先生の解説をもとに簡潔にまとめたものなので、本来の表記とは異なる部分も多いです。また、上山が追記したものには★を付け、さらに、理解があやふやな用語については、検索してまとめたものも紹介していますが、他者がまとめたものは分かりにくいものもあるはずなので、本来の意味付けについては原典である中嶋先生の解説資料をご参照いただければと思います。

貴重な稲岡先生の授業を今後必ず活かすという信念を持ってまとめ、今後活かす決意です。

【内容】

- (1) シーン1 (授業前)
- (2) シーン2 (「生活の論理」を生かした導入)
- (3) シーン3 (日付の読み練習)
- (4) シーン4 (チャンツ)
- (5) シーン5 (代表生徒と即興で会話)
- (6) シーン6 (ペアで What did you do last night? で chat をする)
- (7) シーン7 (ノートに、友だちと会話した内容を書く)
- (8) シーン8 (過去から未来につなげる。時系列を意識しやすいカレンダーを用意する)
- (9) シーン9 (「7月1日が誕生日」の生徒を取り上げ、即興で教材にする。部活動の対戦相手を表現する)
- (10) シーン10 (be going to を使って2つの文を板書し、それを音読する)
- (11) シーン11 (自分のことを be going to を使って表現し合う)
- (12) シーン12 (ALT のチェルシーが、ビデオレターで自分の夏休みの予定を伝える)
- (13) シーン13 (生徒はチェルシーの予定を確認し、自分の夏休みの予定を伝える)

(1) シーン1 (授業前)

□スキル1 授業開始前の生徒との関係構築

授業が始まる前に、生徒とのカジュアルな会話(「雑談」)を交わし、生徒の学習意欲を引き出す。この方法により、生徒はリラックスし、教室での学習に集中しやすくなると同時に、教師との関係を築ききっかけになる。

★おそらくこの話の中でも生徒の情報を収集されていたのではないかな。

□スキル2 出席を確認する際も英語でコミュニケーションを取りながら行う

黙って出席簿に書き込むことはしない。蒔田先生と同じように英語で欠席者を確認しながら、コミュニケーションを取る。さらに欠席者への言葉かけ等の配慮を示す。

□スキル3 パートナー同士であいさつをする

Say hello to your partner A.と言って、生徒同士が隣の生徒と英語であいさつをする。その後は、partner B(縦の生徒)ともあいさつをする。



★私も同様の実践をしているが、授業の最初に一言お世話になるペアで言葉を交わしておくことは、大きな意味があると感じている。(英語での会話に急に入るよりも、一言交わすことで関係を築いておくことができる)

□スキル4 興味を引く教材を使って small talk をする

生徒の関心を引き、授業への興味・関心を喚起するために魅力的な教材を用意する。ここでは、生徒が描いた絵を使って話題を広げている。これにより、生徒の注意が教材に向きやすくなり、授業内容への理解が深まりやすくなる。

□スキル5 授業の流れを明確化する

稲岡先生の授業全体にわたって、生徒は何をするかを把握して活動している。つまり、授業の各段階で何をするかを明確にし、生徒が予測可能な学習活動を行っている。予測可能な授業の流れは、生徒が次に何を準備しておけば良いかを理解しやすくするため、学習効率を高めることができる。

★発達障がい傾向がある生徒にとっても、「見通しのある授業」は参加しやすくなると言われている。

(2) シーン2 (「生活の論理」を生かした導入)

□スキル6 即興でスモールトークを行う

授業開始時に教師が原稿を用意するのではなく、即興で行うスモールトークを通じて生徒との関係を築く。例えば、Did you swim this morning? (「今朝泳いだ?(体育)」)という身近な質問から、生徒の興味や身近な生活に関連する話題を広げることで、生徒誰もが共有できる話題で自然と英語で応答し、コミュニケーションの流れを作ることができる。

□スキル7 学習環境を醸成する

日常的な会話を大切にし、スムーズで自信を持って発言できるクラスの雰囲気を丁寧に作り上げる。I don't like swimming. (「水泳が好きではない」)という先生の発話で生徒が挙手して、理由を尋ねると It is difficult. や I can't swim. など、生徒が話しにくいであろう否定的な内容も堂々と話せるような学習環境を整え、それを全員が受け入れる文化を作る。

□スキル8 他教科での学び・心理状況を把握する

稲岡先生や蒔田先生は、学年主任として、全ての生徒を優しく包み込もうとする。今、生徒がどの教材でどんなことを学んでいて、どんな心理状況化を読み取ろうとすることも大切である。

□スキル9 Crisis management と Risk management の両方を意識する

【クライシスマネジメントとリスクマネジメント】とは?

「クライシスマネジメント(Crisis Management)」とは、突発的に発生する危機的な状況に対処する管理手法で、「リスクマネジメント(Risk Management)」は、将来起こりうる潜在的リスクを予測し、それを回避または軽減するための予防的な管理手法を指す。この両方のマネジメントを意識する教師は、教室での日々の活動を通じて、将来的な問題を予測し対処する準備を整えつつ、予期せぬ問題が発生した際には迅速か



つ適切に対応する能力を持っていることが求められる。

- ① リスクの予測と準備 (教室のシナリオ、生徒の行動や学習上の困難について、事前に対処法を準備する)
- ② 危機発生時の対応 (予期せぬ出来事や緊急事態が発生した際には、生徒の安全を最優先に対応する)
- ③ コミュニケーションと協働 (生徒、保護者、同僚、カウンセラーとコミュニケーションを維持し、情報共有する)
- ④ リフレクションと改善 (経験から学び、将来的なリスクをより効果的に管理する授業方法や方針を調整する)
- ⑤ 教育環境の維持と改善 (日常的に教室環境やルールを確認し、学習障壁を取り除き、リスクを予防する)

★この部分についての知識がなかったため、検索して調べたことをもとにまとめたもの。

□スキル 10 教材としての生徒の経験を活用する

生徒が描いた絵や生徒が経験した出来事 (例えば、サッカーの試合など) を教材にする。教師が一方向的に授業を進行するのではなく、生徒が自らの経験や見解をクラスで共有し、それを話題にして学ぶ。生徒の関心を引き、自然に言語学習を促すことができる。

★最後に Now I come to like soccer. と生徒との話のおかげで自分が変わったと伝えることで、相手を大切に、存在の大きさ (重要性) を暗に伝えているのではないかと思う。

(3) シーン3 (日付の読み練習)

□スキル 11 日常的なコミュニケーションの中で日付の表現を練習する

日常生活における自然な会話の流れの中で、日付の読み方や言い方を練習させる。例えば、"What's the date today?" や "When is your birthday?" といった質問を通じて、実際のコミュニケーションの中で日付に関連するフレーズの使用を促す。

□スキル 12 緊張感と安心感の中での全員が発話する練習を行う

稲岡先生の授業では、日付の読み方を全員が練習した後、生徒一人一人が高速で発音する機会が与えられる。この「全員が当たる」という緊張プロセスにより、生徒は正確な発音を身につけ、発表する際の緊張感を乗り越えることで自信を実感し、英語の発音スキルが向上する (稲岡先生のクラスの学力は非常に高くなる)。さらに、つまずいても、先生が笑顔で待っていて、自然に recast などでフォローをしてくれる。これにより、授業における学習の主体性が高まり、生徒は「主体的に学習に取り組む態度」を身につけることができる。

□スキル 13 クラスメイトからの刺激を通して向上心を高める

個々の生徒が前で発音することで、他の生徒は仲間の発音の進歩に刺激を受け、自己の向上を目指す意欲が高まる。

(4) シーン4 (チャンツ)

□スキル 14 チャンツで正しいリズムと発音を習得する

授業の最初に、全員が声を合わせて行うチャンツ (稲岡先生作成) を通じて、正しいリズムやストレスをマスターさせる。チャンツは、内容語 (名詞、形容詞、副詞、一般動詞、疑問詞、指示代名詞、not) を強く読む (ペンで叩く)。この練習を通して、正しい英語のリズムと発音の基礎を生徒全員に定着させる。教科書の音読でもこれを意識することで、英語らしい読み方になる。(機械でなくペンで叩くことにより、苦手な生徒がリズムを外した時にさりげなく速さを微調整できる)



□スキル 15 先生が時間をかけて作った教材は生徒の信頼関係の構築につながる

教師が時間や手間暇をかけて作ったことが生徒に伝わることは、生徒との信頼関係構築にもつながる。

□スキル 16 授業はライブ (生徒と共につむぐ成果物) を志向する

現状がそうならない場合、「間違い直しが中心の指導」、「モデルを示さず口だけの指示」、「コメントや発音のバリエーションの少なさ」、「内容を深掘りできないこと」などからの脱却が喫緊の課題になる。

(5) シーン5(代表生徒と即興で会話)

□スキル 17 即興で会話の流れを作ってモデルを示す

教師が生徒をリードしながら「モデル」としての即興会話を示し、それを生徒がレポートすることで、会話の流れを理解しやすくする。教師は質問するだけでなく、生徒の言葉を受けて拡張する内容を即興で考え、クラス全体を巻き込む (Did you watch...? / Do you know...?). 生徒が答えられず沈黙する場合には、Sometimes? Almost everyday?などと助け船を出す。

□スキル 18 聴く側の生徒の積極的参加を促す(全員を巻き込む)

生徒には、聞いている側も頭の中で「レスポンス」をしながら聞くように指導する。単なる聴衆ではなく、学習プロセスの一部として活動的に参加させる。このようにして、リスニングスキルを訓練すると同時に、会話への参加意識を高めることができる。

□スキル 19 レポートを通じてメンタリングと自信をつける

生徒が順番に前に出てレポートすることが日常化することで、仲間から学ぶ姿勢(メンタリング)が養われる。話し手がつまづいた場合には、教師が自然にサポートを入れることでクラス全体に安心感をもたらす、理解を深め、自信を築ききっかけになる。さらに、人前で話すことに慣れ、自信を持つようになる(「人は、人前で何かをしたときに、初めて自信になる」)。



□スキル 20 次の活動が分かることで目的を持って学ぶ

稲岡先生の授業は、「聞く(理解)」⇒「ペアで相手に報告する(再現)」⇒「代表生徒が発表をする(聞く・確認)」というプロセスで行われる。これを生徒が知っているため、「次にペアでの報告があるのでしっかり聞いておこう」、「代表生徒の発表があるのでペアでの報告を一生懸命しよう」という気持ちになれる(今の活動が次の活動で役立つ)。

(6) シーン6(ペアで What did you do last night? で chat をする)

□スキル 21 モデルを示すことでコミュニケーションスキルを向上させる

ペアでのチャット活動を行う前に、教師がモデルとしての会話を示し、生徒が話す流れを理解できるようにする。この準備段階により、生徒は自らの体験を英語でスムーズに話しやすくなり、自信を持ちやすくなる。

□スキル 22 生徒の活動を任せっぱなしにしない。教師は必要な役割を果たす

生徒がペアで活動している最中も、教師は生徒を放置せず、気になる生徒のところに行って質問し、会話を促進する。(活動のねらいを押さえており、生徒の活動中に教師は何をすればいいかを明確に理解し、適切に介入する)

(7) シーン7(ノートに、友だちと会話した内容を書く)

□スキル 23 学習内容はライティングを通して定着を図る

生徒が話した内容をノートにまとめることは、理解を深め、記憶に定着させる重要なプロセスである。このため、授業では必ず書く時間(稲岡先生は3分間)を設け、「動」の活動後に「静」の活動として内省を促す(「静」がなければ学習は定着しない)。

□スキル 24 最後の書く活動から逆算をして授業を効果的に組み立てる

授業では、教科書の内容を薄く広く網羅することが大切なのではなく、最後の「書く活動(learn)」から逆算し、必要で無駄のない言語活動を用意することが教師の仕事である。

□スキル 25 生徒が集中する時間設定をする

具体的な時間(例えば3分)を設定して書く活動を行うことで、生徒は集中して取り組むことができる。短時間で集中することは、学習者の心理に「集中して取り組まなければ」という印象を与え、効率的な学習につながる。(3分間は「集中して取り組まなければ間に合わない」、5分間だと「ゆっくりできそう」というイメージを与える)



□スキル 26 活動には有効な時間と人数がある

アバウトに5分や 10 分と指示をしない。授業では 30 秒、60 秒、90 秒、3分、6分(3分×2)が有効。グループにする場合も、3人、4人(2人×2)、6人(2人×3、3人×2)というように、パッと分けられる人数が望ましい。

□スキル 27 辞書を継続的に効果的に活用する

辞書を使って正確な言葉を見つける練習をすることで、生徒の語彙力を増やし、彼らが自分の言いたいことを正確に表現できるようにする。授業で辞書をスムーズに活用している姿は、日常の辞書指導が適切に行われている証拠である。大切なのは、「書きたい(話したい)」というトピック(目的)を用意することと、場面や状況が想像でき、具体的な情報を伝えたいと考えられるように指導すること。

(8) シーン8(過去から未来につなげる。時系列を意識しやすいカレンダーを用意する)

□スキル 28 カレンダーを使用してインタラクティブな指導を行う

カレンダーを使って時間の概念を教えることで、生徒は「数字」や「時系列」を容易に理解できる。例えば、6月30日を指し示して、「これが6月の最終日?」と問いかけ、未来時制の自然な導入につなげる。



□スキル 29 フォーカス・オン・フォームを取り入れる

文法規則を直接教えるのではなく、誕生日などの身近な出来事から生徒に文法の意味を「推測」させる方法で、言語使用における深い理解や気づきを促す。(楨田先生の「折り鶴」、稲岡先生の「日常生活(生活の論理)」)

*【フォーカスオンフォーム(Focus on Form)】とは?

言語の意味を伝えるコミュニケーションの中で、生徒が文法的な形式に注意を向けるよう促す教授法。この手法では、文法を独立した単位として教えるのではなく、意味のある文脈の中で生徒が文法を使い、理解することを目指す。生徒は自然な言語使用の過程で文法規則に気づき、それを学習することができる。一方、フォーカスオンフォームズ(Focus on Forms)とは、文法や語彙などの言語形式(forms)に重点を置く伝統的な教授法。この手法では、文法規則や語彙リストを系統立てて教え、生徒に覚えさせて練習させる。(文法習得を段階的に行い、正確な言語使用を目指す方法として使われる)

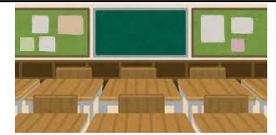
□スキル 30 生徒の個人的な節目を祝う

生徒の誕生日を授業で取り上げ、クラス全体で「Happy Birthday」を歌うことで、未来の出来事に対して「be going to」の形を自然に使う練習を行う。言語教育だけでなく、その生徒を大切に思っていることを示し、温かい教室の雰囲気を作り出す。



□スキル 31 教室の掲示物や職員室の机は、その教師の力量が現れる

学習環境を整えるという意味で、教室掲示(や清掃ロッカーの中)は非常に重要。教師の姿勢(考え方)は、外(教室の中、掲示物)に現れる。時期が過ぎている掲示物は残っていないか? 教師の指導が形だけでなく、生徒一人一人を大切にしている姿勢を持っていることが重要である。



(9) シーン 9(「7月1日が誕生日」の生徒を取り上げ、即興で教材にする。部活動の対戦相手を表現する)

□スキル 32 コミュニケーションの相手(誰のために)を意識させる

生徒の誕生日をクラスで祝っているときに、「彼女(誕生日の本人)の方を向いて」と指導する。手を抜かず、「誰のために」を意識して、その方向を向かせることで、コミュニケーションの相手を大切にする。

□スキル 33 不明確な際のコミュニケーションの取り方を教える

生徒が自身の活動について情報を持っていない場合(部活動の対戦相手など)には、無言にならずに、「I don't know」と言わせることで、コミュニケーションの取り方を教える。

□スキル 34 形成的評価で生徒の自己改善努力を認めて励ます

文法的な誤り(be動詞が抜ける)をした生徒に対しては、笑顔で I'm going to と recast して、正しい表現に

直すよう促す。言わせるだけで終わらず、その修正を適切に認めて形成的評価 (Very good. Good job. など) をし、肯定的なフィードバックを通じて生徒の自己改善を奨励する。

***【recast(リキャスト)】とは?**

生徒がミスをしたときに、教師がそのミスを訂正した形で自然に繰り返すフィードバックの手法。これにより、生徒は間違いを直接指摘されずに正しい形を聞くことができ、「非直接的な訂正」を通して言語を学べる。

(10) シーン 10 (be going to を使って2つの文を板書し、それを音読する)

□スキル 35 教師のみが説明するのではなく、生徒と一緒に文の作り方を考える

教師が直接英文を書いて説明するのではなく、Now I'm going to write sentences. Please help me. と行って、ここでも be going to を自然に使いながら、生徒と一緒に(参画型で)文の作り方を考える。主語を考え、主語の単数・複数を確認させ、「未来表現」の be 動詞の重要性を指導する。

□スキル 36 インタラクティブな形で言語構造への気づきを促す

教師が生徒と一緒に文を作成する際に、意図的に語順や文法構造に関する間違いやエラーを意図的に犯し、それを修正することで、生徒の気づきを引き出す。この手法は、生徒に語順や文法の正しい使用を意識させ、理解を深めることになる。

***【間違い (mistake) とエラー (error) の違い】とは?**

「間違い (mistake)」とは、生徒が既に理解しているルールを適切に適用できなくて起こる一時的な失敗。通常、注意を向けられれば、学習者は自己訂正が可能。

例) ●急いでいるときに「he go to school」のように、既に学習した三単現の「s」を付け忘れる。

●練習では正しく「I have to study tonight」と言えるが、実際の会話では「I must to study tonight」と間違っ使用すること。

「エラー (error)」は、まだ学習途中で、完全には理解していないことから生じる使用上の誤り。系統的で一貫した傾向がある。言語の深い理解が不十分で、自己訂正が難しく、指導を通じ理解を深める必要がある。

例) ●日本語の影響で「I am understanding.」と状態動詞の understand に進行形を使ってしまう。

●冠詞の概念が日本語にないため、「I have cat」と言ってしまう、冠詞「a」を省略する。

□スキル 37 カードを用いた視覚的な教材を活用する

主語の単数・複数を区別するために、異なる「be going to」のカードを用意し、生徒が主語に応じて適切なカードを選ぶ。このような視覚的な教材を使用することで、生徒は「未来表現」の文法構造をより明確に理解しやすくなる。

□スキル 38 所属意識と学校への愛着を育む

教師が部活動や校内イベントに関する情報を共有し、生徒が自分たちの学校に対する所属意識や愛着を感じるように喚起する。(生徒がよく知らない場合は、教師が把握しているものを読んで知らせるなど)



□スキル 39 教師主導ではない生徒参加型の活動にする

主語を softball か volleyball club にするか生徒に選択させる。授業の大枠だけを教師が設定し、細部は生徒に委ね自己決定させることで、生徒が自分たちの意思で授業内容に参加し、進むようにする。この自己決定・参画型のアプローチはビデオゲームと同じ感覚で、生徒の自主性を促し、授業に最後まで取り組もうとするようになる。

□スキル 40 余計な説明を省いて学習効果を高める

余計な情報や説明を省略し、授業の目標に集中させる。例えば、「be going to」と「will」の違いについて過度に説明する代わりに、目の前の文法事項に焦点を当て、生徒が練習し、マスターできるようにする。このように「be going to を使って近未来のこと(すでに決まっていること)を口でスラスラ言えるようになること」というねらいに集中して必要なスキルを習得させることで、学習の効率と効果を高めることができる。

□スキル 41 言語構造の確認と理解を深める

板書された文の音読を通じて、生徒は文法構造の理解を再確認し、意味を完全に理解することで言語の定着を図る。生徒がペアでチェックすることで、互いの理解を深め、学習内容がより身につく。

□スキル 42 高速で読み上げ挙手させることで、リスニングスキルの向上とバリエーションのインプットを目指す

教師が一連の文を高速で読み上げ、生徒に挙手をさせるリスニング活動を行う。これはリスニング能力のアップに加えて、様々な日常活動を表す語彙のインプットを目的としており、生徒の語彙のバリエーションを豊かにすることができる。

□スキル 43 効果的な復習と「意味のある揺り戻し(有意味学習)」を実践する

新しい内容を次々と進めるのではなく、意味のある復習を行い、生徒の既習内容の理解を再確認する。このような意味のある復習は学習効果を高め、余計な活動を避けることで教科書を効率よく進めることができる。

*【意味のある揺り戻し(meaningful backtracking)】とは？

生徒がコミュニケーション中に自分の発話や書いた文に誤りを発見した際に、文を読み返すなど話の流れを少し戻して訂正するプロセス。これにより、生徒は自身の言語エラーに気づき、それを直すことで言語能力をアップできる。意味のある揺り戻しは、「自己訂正」と「自己監視」のスキルを発展させる重要な手法。

□スキル 44 教師の授業運営スタイルを自己反省する

教師が授業を「時間がない、終わらない」と感じる場合は、自分のやりたいこと(くどい説明、プリント、スライド)を用意しているからかもしれない。生徒とのインタラクションの不足からくるものではないか確認をする。

□スキル 45 インタラクティブな授業運営に挑戦する

教材(教科書、プリント、スライド、ゲーム、歌など)を使わずに、生徒との「やり取り」だけで内容を深める練習をする。少しずつインタラクションの場面を増やしていく。最終的には、teacher talk(small talk)も、新出語彙や言語材料の導入も、教科書本文の理解、本時のまとめも全て生徒とのインタラクティブな活動にすることができるようになる(蒔田先生と稲岡先生の授業の神髄)。

□スキル 46 体を動かすことで学習効果が向上する

ペア活動をする際に起立させ「終わったら座る」とすることで、授業のリズムを作り出し、生徒に「自己責任」を持たせる。立ったり座ったりすることは、生徒の集中力を高め、効率的な学習を促進する。(膝を伸ばす(ストレッチ)することで、凝り固まった体をほぐして血行を良くする効果がある。立って呼吸すると深く呼吸ができ、酸素が脳に運ばれやすくなる)こうしたことを教師が知っておき、生徒が立って活動するタイミングを絶妙に仕掛け、目的を持たせて活動させる。活動後にすることの明確な指示を先におくと、生徒は真剣に取り組む。



(11) シーン 11 (自分のことを be going to を使って表現し合う)

□スキル 47 全員を指名し発表させる前にペア活動で精度を高めておく

生徒同士がペアで週末の予定について話し合うことで、相互に正確な表現を高め、その後クラス全体の前で一人一人が発表する。発表内容は、教師が用意した英文をただ繰り返すのではなく、生徒一人一人の自己表現(自分事)を尋ねるといった形になっている。生徒個々を当てて発表させる前に、ペアで全員に言わせるステップを踏むことで、全員の練習を保障し、次の活動での成功確率を高めている。

□スキル 48 生徒の発話を受容し、さらに深掘りするなどして生徒とコミュニケーションを取る

生徒が話す内容を単に順番に確認するだけでなく、生徒が話した内容を繰り返して受け入れたり、さらに質問をして内容を深掘りしたりする。また、生徒が正しく表現できていない場合には、自然な形で訂正を促し(recast)、生徒が自発的に間違いを修正するよう仕向ける。なかなか言えない生徒には、listen to Arashi? Go to the Concert? Study English?のように例を示して、サポートする。

□スキル 49 クラスメートの発話を質問し、答えさせることで、他者の話をよく聞き、伝える機会とする。

各生徒が一度発表した後、稲岡先生はクラスメートが述べた内容を基に質問を行い、他の生徒に答えさせる。これにより、生徒は他者について伝える機会となる。また、他者の発表に対して傍観者ではなく、「理解しながら覚える」という動機が生まれ、受動的な聞き取りから能動的な参加となる。

(12)シーン 12(ALT のチェルシーが、ビデオレターで自分の夏休みの予定を伝える)

□スキル 50 いきなり動画を視聴しない。内容を予測する Pre-listening 活動を行い、関心を持たせる。

生徒に「Chelsey は夏休みに何をしようと思う?」「推測して」と問いかけてから She is going to ~を引き出す。ビデオを視聴する前に、内容を予測させる活動を行うことで実際に ALT が話す内容に生徒の注目が集まり、理解をより深めることができる。



□スキル 51 ALT とのリアルタイムのやりとりを演出する

教師が ALT とコンテンツの目標を共有し、計画的にビデオレターを教材として利用する。ビデオレターを使って、まるで ALT が実際にクラスにいるかのような時間通りの会話を演出している。このために稲岡先生は脚本を作り、間(何秒という設定)を台本に書き込んでいて、ALT はその通りに役割を果たしている。こうした裏での努力により、生徒がコミュニケーションを実際の状況と結びつけるのに役立ち、よりリアルな言語学習の経験ができる。

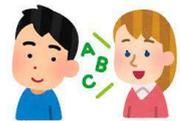


□スキル 52 当事者から文化的な背景知識を提供することで、より現実的な話題提供とする

米国出身の ALT が、アメリカの独立記念日(7月4日)について説明することで、稲岡先生が紹介するよりも、生徒にとってより身近な内容(レリア)となる。オーセンティックな設定であり、生徒が言語の背景にある文化的なコンテキストを理解するのに役立つ。

□スキル 53 ALT が実際のコミュニケーションへの橋渡しをする(目的・場面・状況を踏まえた指導)

ALT からのビデオレターの最後に、「What are you going to do this summer?(みんなは夏休みに何をしよう?)」というメッセージで締めくくり、生徒に質問をすることで、生徒が自分のことを英語で話す動機付け(学習の必然性)となる。実際に ALT への返信という形で、生徒は ALT に伝えるために自然にライティング活動に取り組み、英語を練習することができる。英語を使う必然性、「目的・場面・状況」を踏まえた指導である。



(13)シーン 13(生徒はチェルシーの予定を確認し、自分の夏休みの予定を伝える)

□スキル 54 いきなり話させない。先にモデルを紹介する。

Do you like summer vacation? What are you going to do this summer?というトピックだが、すぐに話をさせないで、まずは先生がモデルを紹介する(大阪在住の 92 歳のおばさんに会いに行く)。これにより、多くの生徒がどのようなものかを話せばよいか理解でき、生徒の発話レベルの向上が期待される。

□スキル 55 準備ができていない生徒がいればきちんと対応する

全員と目をつないで話をするために、準備ができていない生徒がいれば、Please look at me. With your smiles. Thank you. OK?などと注意を促し(学習のレディネスを作ってから)、ゆっくりと話し始める。前をきっちり向いていない生徒がいれば、Face your friends. Please stand up. Look at your friend.などと指示し、生徒ができているのを確認したら Good. と褒める。文法や単語だけでなく、正しいコミュニケーションを指導する。

